

り自由主義を吹き込むものと誤り幼稚園の幼児の活潑なるを見てわ等閑に附しがたしとなし幼稚園禁止令を發したる時に際して此夫人が當路者に建議論を奉り國民に向つて普及の演説を繰返すなど中々通常男子も及ばぬ程なりしといふ此夫人が師範學校課程中に幼児保育の一課を加えんとを主張せし語の中に亞弗利加内部の記事亞細亞極東の氣候、果して母の責務たる幼児保育の一課を差置さても教えなくてわならぬ程の値あるか、幼兒保育法の發見せられざりし昔時に制定せられたる課程及時間割を今日此新教育の大發見ありしに拘らず、變更するを躊躇するわ何たる迂遠ぞと、予も今此夫人の語を借りて全國女子教育に従事せらるゝ當職の方にわ勿論年少の婦人の方々にわ幼兒の保育の保姆の專業にあらで近く我身に迫る大責任なりと覺悟せられんことを勸告して止まないが、更に保姆諸君に

向つてわ婦人と子供と申す屈竟の機關の出來たるを幸として全國幼稚園若くは高等女學校女子師範學校に従事せらるる方々に各地固有の子守歌を徵收せられんことを偏に希望するなり、此事わ嘗て音樂學校教授小山作之助君に話したこともあり、同君も非常の賛成にて自ら従事せんといわれしが或は既に集め畢られたらんも知る可らず左れば之を借りて毎號に分載すること乞われたし、時事新報に昨年登載せられたるもあり今の時にわたり我國各地固有の子守歌を集むるわ此雜誌が他に卒先すべき義務と思わるが如何？、



學 術

獅子の 話

佐藤禮介

前回には、岩川先生が動物中にて最も目出度いもの

考へらるゝ、鶴龜についてのお話があつたが、今回、私は獸中の王として、考へらるゝ、獅子についてお話を致さうと思ふ。

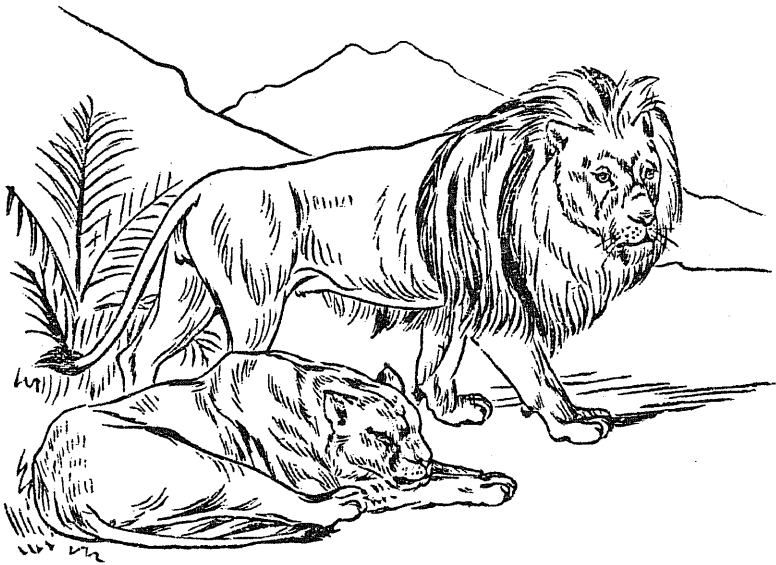
古來の傳説——本草綱目と云へる古書に獅子は百獸の長たり、西域に出づ形虎の如くにして小なり、黄色にして、亦金色の猯狗の如し、而して頭大く尾長し亦青色の者あり銅の頭鐵の額鈎の爪、鋸の牙、垂れたる耳、昂き鼻、目の光り電の如く吼ゆる聲雷の如く形鬣あり牡は尾の上に茸毛大さ斗の如し日々走るに五百里、毎にひとたび吼ゆるときは百獸辟易す虎を拉ぎ犀を裂き象を分つと記せり、如何にも風雲に乗ずる龍虎の臆説にも劣らぬ書き方なりさればにや猛く勇ましきもの、雛形として畫かれ、唐獅子の彫刻物は神聖なる者として神社佛閣の前に安置せられてある、其の他器物衣服の紋様に於て牡丹に唐獅子の形を表はせ

るものが澤山ある、獅子の傳説はかくの如く奇に且つ怪なるが實際は如何なる形で如何なる性質であるか左に述べようと思ふ。

産地と形態——獅子は西部亞細亞及び亞非利加に棲息して居る猛獸である、體の長さは殆ど虎に同じく只少しく小さくある最も大なる獅子は鼻の端から尾の先まで一丈許りあり其の内、尾の長さは三尺計で牝は牡よりも凡一寸許り小さくある。

獅子は猫など、同じ類族であるから全體の形が甚だ能く似て居る併し獅子の瞳孔は圓形で伸縮するもので決して猫の様に縦線となることがない。

獅子の牡は頭の頂、頸及び肩の上に長くバリバリせる毛があつて鬣となつて居り、怒れば之が直立して前方に向うゆる其の怒れる顔貌は實に恐ろしいといふことである、全體の毛色は産地によつて種々であ

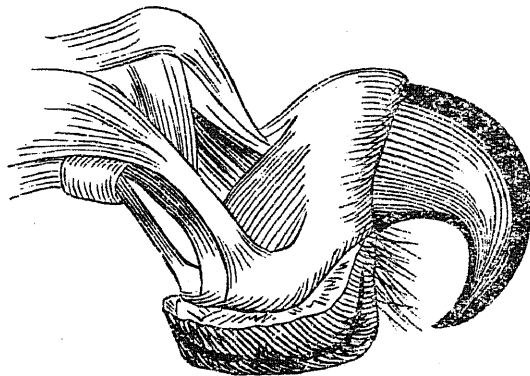


るが通常は黄ばみたる茶色で、往々暗紅色又は淡き灰色
 色なのがある鬣は全體の毛色と違つて淡黒色である、
 牝には少しも鬣を具
 へない、牝牡共に尾

の末端には長い毛の
 總がある、爪は鉤の
 様に曲つて甚だ鋭
 い、平生は之を引き
 上げて爪先が地面
 に觸れない様になつ
 て居る即ち常には爪
 を隠して入用な時に

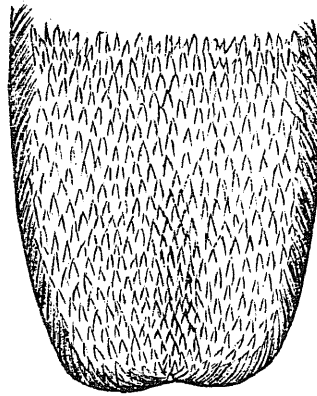
のみ急に之を突き出すのである。

獅子は虎、豹、猫などの様に生きたる獸類を食とす
 るものであるから齒列は甚鋭くなつて居る前齒は餘



程ほど小こいいけれれども牙きば即すなはち犬けん齒しは極きまめて大おほきく敵てきと闘たかふに
は重おもなる武ぶ器きである奥おく齒ば即すなはち白はく齒しは中なか々く鋭えいくて肉にくを嚙か
み切きる用もちをなす。

猫ねこの舌したのザラ／＼するこは世せい人じんの能よく知しつて居ゐる



ことであるが獅し子し
の舌したは一いっ層そうザラザ
ラすすとが甚はなはだ
だしい其その舌したは長ながく
扁ひらたくて其その上じやう面めん
には曲まがりたる棘ごけが
無む數すうに列ならんで居ゐり

舌したの中ちゆう央ゆうにある棘ごけは最もつも長ながくて殆ほとんど一いっ分ぶん七しち厘りん許ばかりもあ
る、故ゆゑに獅し子しの舌したは全まったく大おほきな擦わさ蓋びあ子しの様ようであるから
其その食くふところの獸じゆう骨こつから悉ことごとく筋きん肉にくを舐なり取とることが
出で來きる。

獅し子しの前ぜん脚きゃくの趾あしは五ご本ほんで後こう脚きゃくの趾あしは四し本ほんである趾あしの
下面かめんには厚あつき皮かわを被おほはれて居ゐる肉にく塊かたまりがあるから歩あゆむに
に少すこしも音おとがしない、それで野や獸じゆうを捕とらふる爲ために近ちかづく
のは甚はなはだ便べん利りである、此この他た、消しょう化か器きや呼こく吸そく器きのこ
などは餘あまりくだ／＼しきゆゑ畧りやくす。

習しゅう性せい——佛ぶつ人じんバツフアン (Balfon) は骨かつて極きまめて艶べん麗れい
なる妙みょう文ぶんを以もつて獅し子しの性せい質しつを記き載ざいし勇ゆう猛もう、寛かんだい大だい、高こう尙しやう
等どうの性せい質しつ、深しん切せつなる感かん情じやうを有ゆうするものなりと云いひて居ゐ
るが實じつ際さいは全まったく然しからざるこが知しらるゝのである、

繁はん殖じよく——獅し子しは繁はん殖じよく時じに於おいてのみ一いっ牝びん一いっ牡ぼつの共きやう棲せいを
する、兒いは一いち回かいに通つう常じやう三さん頭とうを産うむ而しかして其その子こが獨どく立りつ
の生せい活かつをなし得うるまで即すなはち三さんヶ年ねんの長ながき年ねん月げつの間あひだ牝め杜と
共ともに協きやう力りきして之これを養よう育いくする元がん來らい此この猫びやう族ぞくの動どう物ぶつにて
は兒こを養やしふことは只ただ牝めのみが負み擔たんする仕し事じである、獅し
子しの如ごとく牡おとも其その兒この爲ために食しょく物ぶつを求もとめて之これを養やしひ且かつ

捕食法を教ふるものは他に多く見ざる例である、獅子は純然たる群居性のもではないが一對の牝牡、及び成長したる兒が群居することがある併し餓ゆるときは一個の餌を争ひて互に闘ふことも往々ある、

夜性——獅子は通常夜間にのみ出で、食物を求める即ち薄暮より沼澤河畔などに待ち伏せして麒麟斑驢水牛の幼兒等を捕へるが其の方法は是等の獸が出来得る丈け近づく迄潜伏し只一躍して前脚にて其の背を攫み是に噛み付く、かゝる場合に至れば野獸は只狼狽して悶へ騒ぐばかりであるから遂に噛み殺さるゝのである、若し一撃の下に之を打ち倒すことが出来ぬときに執念深く無益に追ひ掛くることは致さぬは獅子は到底是等の獸類の迅速に走るのに追ひ付くこと出来ぬ事を知つて居るからである、斯様に失敗するときは獅子は再び別の隠れ場處を求めて野獸の再來を待ち居る。

家畜の受くる害——獅子は餓に迫るときは人家近く出で、家畜を殺して持ち去ることがある、其の餓ゆると極めて甚しいときは白晝牛羊の牧場に來り牧夫番犬をも意とすることなく突進する、此の時に當りては高さ十尺許の塀をも一躍して跳び越えて家畜の群中に突入し最も近けるものを攫み殺すのである、亞非利加、喜望峯地方にては犢を口に咬へながら廣き池を跳び越ゆること恰も猫が鼠を咬へ去るに異ならぬを見たり人がある、彼が數十貫の重荷を咬へつゝ、數尺の墻壁を跳び越ゆる力量の如何ばかり大なるかは吾々の殆ど量り得ざる程である。

水牛との闘争——獅子は斯様に強い獸であるが水牛は獅子の強敵である即ち水牛の猛烈なる奮闘には獅子も辟易することがある、スバルマン(Serrmann)氏の

言によれば「嘗て白晝一頭の獅子が水牛の群に突進したることありしに水牛は獅子を角にて突き倒し死に致すべき重傷を負はしめたるを見た」といふことである又亞非利加探検に就きて有名なるリヴィングストーン氏 (Livingstone) の言によれば「數頭の獅子が時として水牛の群を攻撃することがあるかゝるときは水牛の牡は前面に立ちて獅子と搏闘し牝と幼兎とを後方に保護する」といふて居る。

前日の殘肉——餓えたる獅子は餘程腐りたる肉をもかまはず食ふものである、又前日に喰ひ餘しにる殘肉を翌日再び來りて喰ふ性がある虎豹の如きは獸肉の喰ひ殘しを再び來りて食する様なことがない且つ腐肉は決して食はない。

獅子の吼聲——獅子の吼聲は世の諺にもいはるゝ如く實に壯嚴特殊なるものだといふことである靜かなる

夜には一二哩も隔りたる處にて聞かると、之を聞きたる獸類は大抵恐怖する、家畜の如きは畜舎の一方に集つて戰慄して居る。

食人獅——老ひたる獅子は其の齒次第に磨滅して野獸を捕へ食ふことが困難となるから遂に人類を好みて喰ふ様になり所謂食人獅 Man-eater となることがある、此の癖性を生じたる獅子は村落の近傍に潜伏し夜に入りて土人の茅屋又は旅人の天幕内に躍り入りて人類を咬え去ることがある。

獅子の怒と其の尾——獅子は飽食して且つ怒らぬ時には至極臆病であるが餓又は怒に侵されるれば其の暴猛例へん様なし、さて旅客が若し獅子に出逢ふた時に其の獅子が飽いて居るか性質が平穩になつて居るか又は餓え或は怒つて居るかといふことは其尾に依りて前知することが出来る、食に飽き性穩やかであるときは其

尾の先端が動かないが若し饑餓に迫るか或は發怒して居るときには其尾を左右に振り動かして體の兩側にシユツ／＼と打ち付けるものである、勿論此の時は眼を怒らせ鬣を逆立するが尾は最初から働くから獅子の心狀を知るには最も便利である故に旅客若し獅子を見たるとき其の尾が動かなかつたならば安心して其の側近く通ることが出来るのみならず石を抛ちて追ひ退けることが出来る、之に反して尾が動き初めたらば早速逃るか又は極めて速に射撃して之を殺さねばならぬ。

獅子の狐疑心——獅子は極めて狐疑邪推が深い一たび狐疑心が起れば好める餌食をも放棄して去ることがある、野獸が知らず／＼獅子に近づいて何の抗拒もなしに攫殺せらるゝときは獅子は餘りたやすく獲たる餌を却て疑ふかの如く即ち自分を釣り出す爲に故と置かれた餌ではないかと疑ふ爲か其の野獸を食はずに去

ることがある、喜望峯の一住民が平原に於て不意に獅子に出逢つたが餘りに狼狽恐怖したが爲に腰をぬかして倒れてしまつた、獅子も亦不意に人の出たことを愕いたと見え且つ例の疑ひ深き心からして頻りに倒れた人の近傍を見廻して居つたが他に待ち伏せした者あるとでも思つたものか何もせずをそこ／＼と逃げ去つたといふことである。

要するに——獅子の習性につきて原産地にて觀察した人の記載は大に古來の記録や傳説と違つて居る、古人は獅子の勇猛、高尚、俠氣等を甚しく賞讃してあるが實地の觀察者は皆獅子の恐怖心強きこと、狐疑邪推深くして卑劣なることを記して居る。

(完)

